里見八犬傳

第二輯

巻三

3416
8

へ13
3416

二編玉くしげ 三

秋野勝若院

南總里見八犬傳第二輯 巻之三

東都 曲亭主人編次

第十五回 金蓮寺に番作讐を斃す 拈華庵に束客を留む

前巻既に説ける伏姫富山へ入りし比は十六歳のときなりしが長禄元年の秋なりべし。又金碗入道、大坊は嘉吉元年の秋父孝吉が自殺せしときは既に五歳なりしが長禄二年富山にて伏姫自殺の憂に係り。猛に出家入道をすゝめ。躬を雪水に任じつゝ手藪行脚の首途せし。

このときは九二歳なりしが伏姫は年たゞに十七なりて身ちゝまはず、大坊はかの姫よりその年才五ツの兄なりけれかゝく長禄は三年にて寛正なりしときは又六年にて文正と改元せしが。さるに元年のこゝにて

又應仁と改めらるゝ。僅か二年ありて。文明と改元あるけり。應仁の内乱治まらず。戎馬の蹄。趾を掃ひ名のみ残りける華の洛ハ舊の春還か立ぬ。稍長閑ふるあるに。ぬるもとの比の事なれハ。文明五年春三月。宗全病ミ卒さる。五月ふ至りて。勝元も亦病ミ卒さる。あるゆ。あるくその徒の合戰。征夷ぞ寝ぬけ星を應仁の兵乱とぶ。この年號の長久より十八年おゝ続きけるまゝふ年序を倦まず。伏姫の事あるく、大が行脚の啓行せ。前巻長禄二年より。今文明の季年より至て無慮二十餘年より及べり。この間より大塚信乃が未生已前の事を述。この巻亦復嘉吉より起る。文明の比より至れり。

後土御門天皇の御宇。常德院足利義尚公將軍ゝなるゝ。寛正文明の間ゝ。武蔵國豊嶋郡。菅荒大塚の郷畏より大塚番作一戍とのゝ武士の浪人あるけり。そゝ父近作三戍ハ鎌倉の管領足利持氏の近習ゝり。永享十一年。持氏滅亡のとゝ近作ハ精悍ゝ忠義の近臣と相謀ゝ。

持氏の嫡子春王安王両公遠を護奉て鎌倉を脱去る。下野國ふ赴き結城氏朝ゝ請待せらるゝ。主従その城ゝ籠て寄ゝの大軍を引受て防戦年を重ねるとゝ。士卒の心一致ゝ撓む氣色ハなゝ。嘉吉元年四月十六日。嚴木五郎が反忠より。ゆひ攻破らるゝ。大將氏朝父子ハさゝるゝ。郎方の諸將恩顧の士卒。面も惜ず衝て出奮撃ゝ突戰時ゝ。ゝ。ゝ。

と云汝が母と嬪亀絲八たつうるゐ由縁を求く。武蔵国豊嶋郡大塚よ
潛せ来たつ彼処八汝が本貫ぞ。こゝ先祖の生国なり。則苗字の荘園
なれども今ハ名のみ。他人の有となれば雖ども渠が養ふ
ぞ。なれども亦不便の事汝八命ろぐくて大塚の郷よ赴き父が最期の
ありさまを告く母が仕へ孝を盡せ。然とくこれも拘死ハせず孺君ならハ
と云へとも柳営の御親族有撃が金枝玉葉なれば左右なく命
命ハ及ばべくもぞ。なれども一方を殺脱く。竊よ為ん跟が莫ひまわらせ折
よくハ両公達を偷とり奇らん。さハ大厦の傾くとき一木をもて柱ぶ。
縛成らぬ討死しく黄泉のあん倶もべ死へとも主君重代のあん
佩刀村雨と名づける。このあん佩刀のうへが就て。さるくの奇特ありる中が
殺氣が含く拔ぬ。刀の中心よ露霜が呪てや人を欲るとハ露霜が

まと流れぶぞく。鮮血を洗ふく刀を法ぶ。譬ばかの村雨のふるとも洗ふ異
なるぞとく。村雨と名づける。実が源家の重宝なれば先君持氏を
よりて春王君が襲ふせ給ひく。獲身刀よせ給ひ。孺君とふ人ども。
今ハん佩刀ハこゝぶ。あり。こゝ本意を為遂ぎ。主後命を其
刀よ隕さぶ。このあん佩刀が敵よとれん。さぞハいかく遺恨なるべ。よりて
汝に預ける。孺君必死を殷ぶ。ひく。喝ぶ世ぶ。一番が生
命を捨てく。宝刀を返ぶ。又殺ぶ。ひるべ。ぶ。君父の像見え
と云死主君と云ぶ。まつるく。ん菩提を吊ぶ。努ぶ疎器ぶ。
ぶ。為ぶ。とりや。と現示。錦の嚢よ納る。腰よ帯る村雨の宝刀とこゝ
子が遊興ける。番作二八の少年なれども。その心ざ足く人ぶ。
やぶ。ぶ。ぶ。

受牧めたりしに安房の師教訓有ざるもあぐ〻ふ忝く。もぢく服膺仕るぬ。
小福とりとめこぶ父ハ鎌倉殿持氏の家臣なり。某寔ハ不肖なれども君
父の必死を外ハ又く脱る欲ん。や。なれを惜ミ織を顧ミ父子のろ
共ハ死地ハ就るべ名聞ハ似く君父ハ益なし。存命く母と嫂を養へと
宜のまる。ち慈ミハ某が身ひとつハゆゑど親子三人がうへハ係るかたんでふ
推辞なきうん。とハいへ再會揣ぐ。ち別ハゆゑ某ち先つまつふんせあ
てく親子のろ共ハ。虎口を脱ハ良く。ち澄の威毛のいと花ゆゑて目ぐろる。
雑兵の草具足袖解捨ゝまるせん。ち是ハや穿ゝえるひ孫と愚めくかひ
がひしく落支度をいそぶせハ父ハおぐ乾ぬ涙の目尻拭ひもあぐ莞爾と
笑ミ。番作微妙ひつるゝ汝只管血氣ハ逸ハ死んとて争ひや
せん辞ひやせんとゝふまハ似をるゝ。ハ親恥ゝ孝心るゝ固より光期のゝ

るゝとゝるも雑兵ハ。ちく一圓虎口を脱ハるゝ。ちくハ是天親と
子ぶ。のろ共ハ奔ゝるハ謀るゝハ似ゝる。汝ハ先ハ行ハ落よ。ハ又後ハ。
途引ちぐく支去なんひそげや急げと焦燥声ハ矢叫の音ハ紛ハるく攻
入る敵軍。必死の城兵。奮るもあハ。名をるき仇武者ハ足ハ信
ちく風ハ落ふの内く如く。塀を踰溝を渉ゝく。路なき途求めつ。四零
ハ落ハ逃亡ゝる。繹の紛ハる大塚親子も辛ゝて城中を脱ハ去親ハ子を
見ハ人ハども竟ハその親ぶ見えぢ。子ハ又親を索ハどもあくよ絶く
るゝハけり抑ハこの一條の物語ハ肇輯第一の巻端ハ現出ゝる結城合戦
落城のとき里見季基遺列ゝく。嫡男義実を延せゝと是同日の夜ハて。
彼ハ義ハ仗る智勇の大將此ハ城忠譜第の近臣官職素よりその差あり。
言私ハ及ぶとゝく。ども恩義のゝハ身を殺ゝその子のゝるハ訓をのとせゝ。

まろろハ符節を合さるぬく人の親ろ慈しおのづろろる城なり。却説大塚
番作ハ父の必死を外ゐ尺く。存命べくもろろどそを爭人も火急の折
ろり。志氏立んとく父の今果ゐ却氏ろろせよ。ろ氏所ゐ時を稂しく。
親も子も虜とろろハ後悔其処ゑ立ぐ已一旦その意ゑ任さるとき又
せんとべのろろぐやんとそのとゑゐたや思念しく。脫て城中を脫ま生
袖號を擲擲捨て髮ゐる素しく面を隱し。敵兵ゐ立ち雜ア。両公達乃
もん所在と。ろのびくゐ窺ひけるいひあろさ彼ど君を巡ふ公ハゐ臣父臣
作ハとるも敵陣ゐ紛ま入ろく。縛の為体を窺ふゐ春王安王のゐ胞兄弟ハ
管領清方が後軍長尾因幡ゐが生拘らま軍散ぐく後ゐ殘倉へ
と伯えしろ匠他ハ獨姿を変容を窶しく。先途氏ろんとさる程ゑ五月
十日ゐ及びく清方則長尾因幡ゐを警固使と。信濃ゐ政康を
副使と。両公達氏ゐ奉しそよろしく京都へぞ上せける。
さまゑ大塚近他ハとのとゑゐ又政康が後率ゐろろ侍して陰ろぐろ西君の
もん供しをりとゐかくもして道中ゐく竊とりまゐせんと豫ろく謀アろる
ろぐろ宗徒の兵士二百餘騎四面八方をうちかこそ夜ハ通宵本陣ゑ篝火を
燒明し。戮隊の火長迭代ゑ夜行しく。露たろアそを由ゐ却せぐれハ近他を
いろゐゐ似ぐ子こゐ肺肝を摧くゐのろ絶てその隙ろろアけり。さゐるどゐ
両公達ハ五宿六宿と旅宿をかさゐく。ちるど月の十六日ゐ青野ゐ原を過り
ゐハ浩処ゑ京都ゑ將軍よりもん使あり。両公達を今さろゐ都へハとそ
ゐんろる略次ゐくそゐく絲しまゐるせ。あん首級とのぼせよと佶仰下され
さろと長尾ホとるゑ兼りさべとく矢濃路ろる樽井の道場金蓮寺ゐもん
ろ輿を扛入るさせ。その夜住持を戒師とろく。形のごくとり彩ひ矢来の四面ゐ

舟火焼〳〵く春王君安王君を敷草の上に推のぼ〳〵く軍期のよし公告
なり嘆息しつゝ退けば住持ハ念珠揉鳴らし〳〵同近く進て叮嚀に十念と
授ける。春王君ハ大人〳〵く安王君ハ子ども〳〵とうち對し因まとろ〳〵その日よる
かるべ〳〵かゝるべくぞ思ひ〳〵ぬ。ゆく〳〵べ前月結城ゆく氏朝をたゞめとゝく。
ゆゑとゝぶるに討死せ。いくその武士の初月君に周まあひく同肥がその
日に死ぬるハせめてもの罪滅しに行るゝ。かゝるべる數元ひとそとのゞあ
ゆべうち点武西方と浄土とやふん。父上母君まゝまと人が海てゆ
へべ。元〳〵ゆゝべよ亡親よ遭なるのなゝべ何ゑ悲べ行べ元さられ冥土
の路ゝぶ。ゝれ心ゞそく行り。後まゆふる後まゞと送に練め激さまく。
驚ゞる氣色ゝく。さゝゆる堂ゞ死ゝち合〳〵ゝや目を閉く俟ゆべ長尾が
老黨牡蛎崎小二郎錦織頸二切鞆掛さる刀を引提て。もん後方めゞゝち

よゝと。ゝゝ死ゝとれを攻めゝゞ長尾ハさゝゝ政康に。ある痛まゝとだゝゝみ。
鼻ゝちかめゞ雑兵おゞ。猛の袖を濡〳〵けゝ況や人の後方よをゝゝとのゆ
体を見なる。大塚匠作ハ声を呑む涙ハ泉の涌ゞく。胸潰ゝ腸断ゝ某
とゝふゆと名告ゝべゝそあれ名告れぬ主後三世の辞別何のゝゝ木を恨ゝのゝ。
又せんゝゞゆゝる元まゝゆ憤無ゝ〳〵く。三面六臂あゝゞゝそ。ゝの
期よ及ゞく公達死救ひなる。ゞゝ殉腹切ゝんハ易けゝゞ。
せめく當座の讐敵長尾を殺ゝく。ゝゝ死ん。いみく彼処ハ間遠ゝゆ〳〵
ゝゝん〳〵ゝの塗ゝゆ〳〵。よく牡蛎崎錦織ゝゆゝ共主君を害ゝる怨ゝ
ゆゝゞ。這奴ホゝゝゝゝ討果〳〵く。いでや黄泉のもん郷導仕ゝん
裏よ尋思の臍を固めつゝ。刀の鞘釘舐湿〳〵く。西へ遠ゝ。東よ居
ゆ近ゝゝんとゝ。程ゆ二人の大刀とり矢声をゝて晃ゝ刀のゆ

怒を報ひ番作君父の首級をかくす

大塚番作

みさり頻二

牡蛎崎小二郎

べ。両公達の小頭顱ハ礫と地に落さり。匠作吐嗟と用続せ。嶮固の武士を跟踰く。矢来の内に跳入る。両公達のちん傳。大塚匠作ふふあり。怒乃刃受よりやと怒の大音。名告りけく。二尺九寸の大業物。板目尖く錦織頭二ゞ自尖より乳の下おぐ。だぶとどんと砕仆せば。牡蛎崎小二郎大ふふ驚き原来癖者脱さづと含まる血刀閃く。遽く抜る匠作ぐ右の脱水も涌くを砕落く。弱るところ畳みけく。細頸裳石とうち落せば。陣笠被る一個の雑兵。群左さらぐ兵士を推ける。拉ぶ知くふ。矢来の内へ進入らく。両公達のあん首級と。左目ふ髻個よせ匠作ぐ首さえとりあげ。改髻を口ふ楚と銜えく。尤目るぐりに腰刀ぬくを見て壮蛎崎を。乾竹割に砕伏さり。ぶひりけるれるれば。二百餘人の兵士ぶ。あまよく。と散動くの。近ふ呆まくせんまぐちぐ遠ふを

前る人ふ堰まく。左右るくハ進を沼ぐ。その隙ふ件のそのこハ陣笠ふ被ぶ。ふ撥遣乗持氏朝臣恩顧の近臣大塚匠作三戍ろ一子。番作一戍十六歳親の教訓固辞くして戦場ふ脱ぎ。父ふハ忠ふ殺ぶ。亦君父の先途ふ果んるふ。とあ。ふ親の仇人ハ。ちとくり。こまと。ぶんふのあふ。擲よやっ。と喚ぶハ因幡ふ佶とりく。原来結城の残黨ゞ早晩紛ま入くるぞ。遮莫ふも。えたふぬ童ゞ分際で何ゆゞのるやハまふ。彼生拘まと下知まるべ。兼るとゞ。鬚の士卒ふとりふ。せんと矢来の内ふ入くんとまふ。ふ真額梨割。軍切。秘術を。喝きふ煙の大刀風。聲ハ草の偃ま如く。又秋葉の散るごく。その刀尖ふ向ふ。深痍ゞ負ぬ。るまこけり。故あるる番作ゞ。刀ハ名ふ。村雨るまゞ。刃の奇特。衍ふ。ぶ。うち振るさゞ。ぶふ刀尖より。涌出る水。挾霧のごく。四角ハ

方へ走りて、焼つけて、蕉火笛火とて、が為に、うち滅さるる時、一も皐月の天、ふるびて、昏の雨雲いやかさなりて、十六日の月、ようやくに、如法暗夜となりぬ。長尾が士卒は同士撃して、痍を被むるもの、多くは、番兵を、この光景は、天の祐といふべく、乱れ、撃、靡して、殺開を、矢来の外へ、郷と、生くるは、勢の中へ、割って入り、透て、窺て、墓原なる、藪を潜て、溝を、飛こえ、往方も、知れぬ、ばかりに、紛れて、現由、敵大敵、なく、事、熟なる、長尾、なれた、名剣の、奇特、より、毫、火、人、滅、ぬ、癖者を、なる、搦手、剰、春王、安王の、首級を、奪ひ、とる、面目を、失はず、さて、あるべき、よ、あらざるべ、京都へ、使者を、遣せて、且、室町、将軍へ、縛の、趣、所、存、その、夜より、八方へ、部、して、日毎、番、徒、往方を、索求、ども、そ、ぞ、とも、なるべ、死、ぬ、徒、日を、送る、ども、京都へ、遣せる、使者、なる、て、御教

書、とて、出て、因幡、恭、く、受、て、みるに、共、拝見、て、略、春王、安王、首級を、奪ひ、とる、大、なる、越度、ども、既、絶果、て、盗、あるべく、四家、害、あらざ、よ、て、長尾、因幡、今度、軍功、換思食、罪、宥、鎌倉へ、罷下て、清方、告、残党、窮鼠、者也、仍、執達如件、嘉吉元年五月十八日、斯、義淳、奉る、と、続、長尾、主従、微笑、て、安堵、躯、両公、達、敵、士卒、亡、金蓮寺、葬、果て、次、日、樽井、渡足、鎌倉、投て、還りけ、長尾、が、この、下、結る、案下、菩提、大塚、番作、死、の覚期、忠孝、滅、獲せ、神明、仏陀、冥助、一條、血路、用、金蓮寺、脱、去、東、望、終、夜、

山路ふみこけ入り。樵夫のかよふ細道ふたたびくれて天を明し。次の日も終日くれ。只管よすがら行ふ十七日の黄昏ふと吉蘇の御坂のふもとなる夜長嶽の麓ふ出さりこの行程を数へまへ樽井より北餘里三十里ふ疲るべし。さてもぐ追人へかくしとそくへ忽地仏教くるしく足の疼痛酷しとよこぶ身を

又くまたび浅瘍ふまとも五六个所鮮血ふ衣ふ浸さぬ日ハ加以昨夜より飲も食ひぐ疲りふけとも心神倶ふらく疲労ふく一歩も運ぶこと

あらず。表ふ激しく道次ふ立ふ息へもど君父の元を隠さんと。苦痛を忍びく彼此と便宜の墓所を求るふこの辺ハ里遠ふ山ふとて殆ふ雲近く峯ハ翠ふ水皓ふ向上ふ青壁刀しく削るごく。直下ふ碧潭鑿ふく穿てふ仰ぐふ目ふ視る佳景ふふふあふ祇ど抱ふ身ふ心ふとふ

ふもど颯ふふる松風ハ追来る歌の声かと疑ひ嘯ふふる鳥語ハ憂を慰

む友とふふもど。

行ふ山路より。山道ふけふふ行く。十七日の月の影山の端ふ升る。孔樹垣ふく締遠しふる白屋の所ふふふふふけり。庭門の緒折戸ハ半扇折失せく。荒ふ元ふまの孤館ふり。今宵ハふふふふ足と休めく。一碗の粥ふを乞めとふふへば庭ふ進ふ入ふふく月を燭ふとふんかふふれば。ふふふん一宇の田舎道場ふく。持佛堂とおぼしき檜ふ檜の輪板を額ふく。拈華庵の三字ふ掛ふり。そふ堂ふふふ遍所ふ磨滅ふく。幽ふそ続ふふる其孔

ふふとふふふふ墓所ふく石卵塔ふふふふふふふふ。番地ふく。ふふふふ。君父の頭顱を座ふふふ。ふふふふ。明ふ地ふ由を告ふふ。ふふふふ

かふふふふふふふふふ。ふふふふ。菴主ふハふふふふふふふふ。ふふふふ。葬ふ果ふ後ふふふふ宿ふ

ふふふふふふふふふ。ふふふふふふふふふ

勢。
勢化さて何処より葬人と左邊右邊をこゝ久まで。新葬とおぼのゝくて。石を
居ざる一座の塚あり。このほとりの壤ゆゑ。掘殘さるゆゑ便りよけまで。
この新葬と推並べて。そこゝまくゆ穴を掘て。三頭を深く瘞めゝく。舊乃如
くゆ壤穴挑ひ跪さて合掌し。念じ果て身を起し。鍾さ人簀子の表へ
返ひて。裡面なる人のあるやうすや。維と答る声ゆ。せゝどかくて庵編の方ゆ
立より。ほとゝくと戸を敲たゝく。嘯とこの菴主ゆ。あゆ人。と問て山路ゆ日を
くゝしく。餓つゝる行人なり。素より慈善をあるゞとゆ。道場とそ
こんなれ今宵穴あらさせゆ山。といひけゝく戸を推開けゆ菴主とおぼ
ちたるゆゝをゝぐ。そひゞきゆたる一個の女子。その年ゆ可二八鄙ゆゝあれど
籬圍ゝ露穴含る野の花の。匂とゞゝく風情ゝく。独孤燈ゆさ。數人
まちつゝびゝるゆめちゝるゞ。今番作ゞゆ門更ゞ。戸を推開ゝく進へる。

その為体の異なるゆ。驚たゆそ。ゝとゝく應答ゆゝ。ゆ。ゝ。ゝ。
目成ゆゝ。女子ゆひとゞ堪ゞゆ。ゝ。ゝ。ゝ

と事あるに庵主の外に戍る人なし。嚮に亡親の墓参りとて行
かれ庵主の法師に問へとあるまゝよくこそ来つるかゝる豪家に貧道は大
井の郷までゆくに黄昏にはなるべ。たゞ一人にて留守してよといふ
るに固辞ぐるく。跡にぐるく悔しく今ゝと俟ぐに日も
暮るくぐるに捨てかへるに還るまぢせんとぐもるく行るゝ飯に
あたるべ。ふぐに任せぐ。といふに番犬あへどいらるゝ
理りなきとぐも庵主の還るに及ぶくんとく。報酬の窮を救はれぐ
る枯魚の市に售きん人を救ふに出家の本願庵主に勧めぐ
とも何ぞ答ぐ得べ。り。人にまゝくうち腹ぐ拒者にてあん
身を叱らぐ某よりくしひ釋べ。枉ぐ餓渴を救ひぬ。とこ求るに推辭
るく山折敷に麻布帛うち掛る。庵主の碗をそぐまに番犬がゝと

つまにとるく山擔に藤籠せ。飯糧をうせく。堆高く盛るいぐと乾菜
まぐるの魚肉に時にとるく八美味珍膳皿に塩盈玉味噌にうに口濡を
はゝかぬ。糧の粮食竭るまぐ。愉く食べ畢るく飲べ。に及ぶ遮得ぬ
遣ぐ。をうに子へとり納めく。中に客人餓渴に救ひあるせうに庵の留守に
うに及ぶ。共に今宵を曉ぐ。人の疑ひに及ぶに出くに及ぶ人
と強面に及耳にもうけど袖に及ぶ。く臂さ伸とぐ及ぶくの如く数个
所の金瘡あるに。ぐうに臥房に寝ぐ。ぐとく。何に及ぶ疑
ひに入ぐ。ぐ枉ぐ一宿曉ぐ。ぐ飢る腹に縋ひく。今一ゝに疲労を
ぬぐく一歩もゆに及ぐ。夏の夜に及ぶ短く。初夜ぐに及ぶ。庵主に
還ぐ。ひに枉ぐ一宿曉ぐ。ぐと他に及ぶくに及ぶ推辭に及ぶく
歎息。ぐに便に及ぶ。ぐとに及ぶとぐ。ぐに及ぶ

ちんが方がおろかに任せぬ人ちりはあれども山寺なるゆゑに客殿といふものをしつらひ枕元つけく本堂のまへに今宵暁しも人山里のとりなるゆへ蚤蚊は絶てなかりしとぶらふ番僧うちわらひ笑ひ理なく宿をこ得さる歟しきふるまひに腹元云ふ盡しかたし滅ま女中の賜ものえ申しるべ女子は蚊く指燭しくとまりくしかれ。とさし出て泰しと右ゆふとり左ゆふ隔亮推知りそ。持佛堂へぞ寝ま申ぬ。

第十六回

白刃の下ゆ鸞鳳良縁を結ぶ
天女乃廟ま夫妻一子を祈る

却説大塚番作は浅瘍ゆまとども一昏夜黙の程をまふけまに疲労とともゆその瘍痛くく通宵いも祝ふまとも枕ゆかよゆ松の声溪澗の音さとびくぬるとゆるゆ目睡ん紙門隔まうちゆ潭ゆ声まるゆ鶯鳴枕を歌て熟

聽ゆ老つける男の声ん。さまぞ菴主はかるまま久。渠何る氣のゆゆゆあらんと耳を澄しく伺く程ゆ忽地女子の泣声しくそゆ伏のこゑ。むざんなり。衆生清度ゆ佛のをしえよりそまぐゆ及ぎとも必氣機を破戒の罪法衣ま愧ぎ刃ゆく殺人ま情ゆ。とゆく正しく宿貸ま吾をとめし女子なり。原来菴主ゆ破戒の悪僧妍き少女を妻ゆく彼奴を餌ゆ旅人をとめ。竊ゆ殺しく物欲ま山賊ま穴まり。ま君父の怨氣復しを雪め危難を脱まてあまぐまりゆ阿容ま。人欲征ま。ま人ま山賊のゆゆ死人や先ま。ま起く帶引緒刀を賈ゆ。かぐまくぐり。紙門の隙ま潜ひまりく用園乃間準より蟒の容ま網窺るゆ。その年四十あまりの悪僧ゆゆ一挺の薬刀ま揚く女子ま對ひく威しゆ賺しゆ。ま定ゆ伽の元孫ま氣ま人ま面魂

山院ふ宿
番作
東
白牡
陰
たつう
月
竜主蛟牛

番作

女子ハこれ死禁あくまで髪ふりまきてよゝと泣害心既ハ顕ぬさるる体ハ番所ハ
聊も疑ひ紙門を丁と蹴ひらく。庵湯のくゝ人跳出山賊ども死殺さん敢
こゝまでまづ汝を殺さべ〜と罵あくまで死かまべ悪僧大刀ふりかぶる驚怪
刀を閃〜く。敵人とも拳の下を潜ぬ脱々足死ぬ〜く腰眼のあこまる紙
徼と蹴る蹴らるく前へ倒るゝと五六歩走りて。ゆうやゝ踏駐まる
かくるく突かくる死右へ流〜左へ流〜。数回ケ。悩〜く。疲労る死つけ入りく。
竟ハ刀をうち落せば悪僧いよ〜ふらふら慌て逃人とまゝ番所ハ薬刀を
ぬ〜とまゝ揚く。賊僧天罰ぬ〜と罵る声とゝもに共ハあ〜せけるる
刀の電光脅倘死ふく劈さう。炙所の痛痍ハ。霎時も沼堪ぎ悪僧ハ苦と
叫びく。仆る胸膈。そ免の刀尖刺つぬ〜ふ〜引抜薬刀血を揮さりて刀と
拭ハ。滕裂て逃ゆるぞ。伏沈ゝまゝ女子ハ對ひく眼死瞪〜〜声をふり立

汝ハ甲夜ハ飯を惠く。一碗の恩あるハ仇ふ。又賊僧ぶかくりまくられと殺
さんとゝ死禁ゆ。とハ側隠のゝ心ゆゑとゝ。この賊僧ぶ妻とゝりて居まで
いくそのハを殺せ。見も亦ふべくまぞ。されば脱きぬ天の縁速ハ首伏〜く。
刀を受よいふぞや。と問きて僅ハ頭死挙。その疑ひハ情由ふくぬ。ハ方ぶ
心の表ひよりそこゝを固ふと知るもおくぞ冷笑ひ浅
く言を左右ハよせく。時を稂〜〜小賊ホぶかくる死まちく夫のくゝふ。
怒死復人とゝハ汝ぶ留中。こゝまかくるとの伎倆ハ乗んや。告ぶへこれりて
いくそ人と打晃を菜刀の光と共ハ花退死中ハ俟ふくハとあるとハ人聴ぬ
怒の刀尖何ぬまでのと黄縁を刀頭ハ指もものよ竹の雪ハ折ふ人風情ふて右
て死伸。左死衝片膝立く身を反〜〜後ざゝれ逃遠る死番所ふ
逃さぞと髪べ引死拂べ沈ゝ立人とまゝべ頂の上ハ閃く氷の刀脱きるこゝ死

懐ゝ〻こゝ入る間もなく砍人と進む目前へ出を一通つゝけくことゝて疑ひ散〻多人なるやと両の手ゝ引延〻る命毛の筆ゝ示せ〻その外れ素姓番作得と透〻つゝくゝ刀をとゝ直〻ゝるくゝ書状の名印梵妻賊婦ゞ艶書欲とゝゝゝゝ似ぎ男士の遺書ゝそゝあゝゝそのの情由殆ゝと身を切〻〻刀を席薦ゝ突立く膝折敷く目守くゝ。當下女子ハ一通を巻ゝゝ目を拭ひゝゝ道場乃留守ぜ〻間ゝ今宵の尼難搗く加てゝ角ゞ〻〻ゝ埋ゝゝ合ゝ匿むゝよ〻ゝゝゝ抑ゝゝゝ御坂の人氏井丹三直秀ゞ女児ゝゝ束と鳴ゝゝゝゝ父直秀ハ鎌倉殿持氏の恩顧の武士ぐ〻ゝゝ持氏朝臣のゝ滅亡両公達ハ結城の城へ猶籠ゝ〻ゝ御坂とゝゝ起ゝ勢僅ゝ十餘人倶〻く結城ゝ馳加ゝ合戦年久累月ゝゝゝ孺君れ

武運切〻せゝゝゝ月の十六日ゝ結城の城を陥さゝ〻く名ある人〻ゝゝ共ゝ父直秀ゝ〻ゝゝゝゝ

布施齎〻くこの人もけふも亡親の墓系ひとさる毎ゆ菴主ハ慇懃ゆ慰めて
たゞ〻ゞが行とて庵の留守ゑ任用〻く生てゐたつる。こゝ〻てのるゆハ甲夜の間ゆ
既ゆあゆ刃ゆ告給りこの道場を拓華といひ菴主の法名ハ蚊牛とゆゝ人。
彼此人の帰依僧ゆくらゞ家ゆ亦檀越るゝハ聊疑ふよゝをもるく猜るゝ
隨ゆ推辭ゆ給く菴を守るく日をくゝ〻菴主ゞ還るく後ゆ稍さゝろありてのの
而るとゝろゝ浅ゆ〻ゑかるこの法師何の給ゆゆ懸想〻く。ゝゝゝを一宿
留人さゝふ詭欺く留守ゑ挑へ小夜深ゆ比かゝり来〻くゝゝゝを捉へて艶
語。法師ゆゝ又あるゆゞゑ嬉けさゝゑゞゝゆ自浅ゝ阻ゝてほゝとゝへよゝ著
ゑゞ果ハ威の業力をゝち内〻く挑む給ゆゝその声ゝゝ高ゝるゝてのごゝゑ
あゝ刃ゆ疑れゝゝひけるく殺さゝゝ給り。只ゝ過世の業因欲仏弟子とて寵と
貪ゝ詭をゝく〻ゝゝゑ留め強く姦さんとせ〻冥罰ハ立地ゆくその刃ゆ

及ゞ。いと恐〻むべゑゝとゆゝゝ人。さゝゝびゆん刃ゆ宿せ〻ゝゝゝ菴主ゆ告るゆ
逃るく〻。縛ゝやあるゝ及るゆゑゑ渠いゝゝゝゝゝゝゝが外ゆゝ人ゆゝゝゝゝ
ゆ給ゝ人。あゝ刃ゆゝ思惟く。その疑ひゑ散〻ゆゝさゝびゝゝふゆ結城
の残党他の凋落を自の利ゆて捕く都へ牽人とるゞゞ脱るゝゆ路へゝゝ
人を殺〻く物ゑ畧る。賊婦梵妻るゞどゝゆ刃ゆ被せゞ給濡衣るゝゞゞ乾さゞゞ
死るゞ。ゝゝゝのゝゝゝゝゝ亡親の名ゑ汚さゞ。ゝゝゝゝゝゝゝ

固めしが他支るく相彈ゆるしかくく落城の日ゆ及びぬ。聊そふはあれば某ハ父ろろ共虎口を逭れて両公達のあん跟ゆ墓ゆ奇り。樓井ゆそ奈りしゆ。孺君其処ゆ駐まるゆ父通俊ゆ討死せり。某當坐ゆ親の仇牡蛎崎小二郎といふゆ死奪ひとりて血戰しく必死を脱れ一昏夜ゆく二十餘里既ゆ過ゆ来ゆ見ゆ二頭を瘞んとそゆれくく當寺の墓所。ゆく究竟と新葬のそとるの壙を掘發しゆ鏑ゆ其処へ埋果ゆ。さて宿つ死ゆ。そしてゆ固ゆる。ゆ死ゆ落人ゆく。吹く風ゆ尚ゆ死ゆけば鄙ゆ法師ゆ為体。そのいふよゆ死よくも為仲のぞ。ゆ死害るゆめと思ひゆ。ゆ死ゆ要時を擬幾せぞ早ゆて死殺せしゆ。おのゆ魂忽ゆ似ゆ。そゆぞしく。ゆん死を救ひそゆぞ思僧を殊せゆ。ゆ死冥罰ゆ。ゆん死ゆ何と女ゆん。ゆん死ゆ意ゆ。ゆとひぐゆ筋ゆぞ。籠城の日ゆ直秀ゆ。ゆ父ゆ東

孺君武運ゆ。ゆ世ゆく。東國ゆ異ゆ属しゆ。ゆ一個の女児あり。子息の帰ゆ進せん。ゆ公私の幸ゆ必ゆ賜ゆん。と契ゆ親ゆ為ゆ。ゆ共ゆ必ゆ死を脱ゆ。ゆ名ゆ。ゆ命ゆ誠ゆ。ゆ告ゆ死ゆ親達ゆ。ゆ合ゆ。何とゆ。ゆ東ゆ。ゆ。ゆ。

妹伏とゝろんもとぞゝ〜ゝぞゝけふとゝろゝ〜く存亡をあゝ勇と共ゝせまゝ元外ゝ
情願ハゝ元ぞとよ然ゝとゝろゝせゝひゝ拓とゝひゝあゝど頼ゝゝうち掩ゝゝ番作ゝて
感嘆〜ゝゝゝゝぞゝゝゝゝ男姑塚ゝ並ゝ〜西公達の送骨を守るゝゝゝゝど約
東かゝゝ元妹と伏よ還會せゝゝひゝぬゝゝ持親のゝゝ元魂の償ゝゝゝよ疑ひ
ゝ〜かゝゝゝゝゝゝ身を携ゝく深く浮世ゝ潛ゝゝ〜然ゝゝゝゝゝゝ親の喪ゝゝゝゝ
夫妻とゝろんもゝゝゝゝ十二月の服果ゝく又更めゝく夫婦とゝゝゝんとゝゝよ
ゝゝゝ東ゝゝち点ゝゝゝゝゝゝゝ如右ぞゝゝゝゝゝ為ゝ既よ蚊牛法師を殺〜
ゝゝゝゝもぞゝゝん後の狭危ゝゝゝゝゝゝゝ

彼処の君父の墳墓まうでとて死燎とよそほふあく孩ど賊の寨とまをしつ
ゆゑ　ゆゑ　かのこ　ゆゑ
忍びごとをとて己とも伴ざるをとびうりつ。倘後ゴ大ゴ丸ぬ赤丸ゴ丸ん
え　ゆゑ　ごと　ゆゑ　ごと　ゆゑ　ごと

その月の晦日四十の月代入のとつく。卒ゐたりるくなる迄うど鳥の外よ泣
れ。ゆく行ゞ走送りて。標の石ハ苔蒸せども残るものハ稀なり死かくく
亀係ハ情願の如く。墓六と夫婦よりるくく一両年を送る程ゐ嘉吉二年
の比うしよ前管領持氏朝臣の季のあん子。永壽王とヤせし鎌倉滅
亡のとき乳母ゞ抱き信濃の山中ゐ脱出ものゞ郡の安養寺の住僧も
乳母ゞ兄ゐる程ゐ。精悍しくとりめし雑筭の近臣大井扶光と心程
合しく年来養育月志ゆゑと鎌倉の風聞せしゞ管領憲忠の老臣長
尾判官昌賢と五郎東國の諸将と相謀て遂ゐ鎌倉へ迎とりて八
州の連帥と仰ぐ者ゐ則元服させまゐらせくく左兵衛督成氏とぞ申し
けるさて結城ゐく討死せし家臣の子孫ゐ石出させまゐらせ又彼ゐく
山墓六ハ時ゐ沒ぜしゞ。俄頃ゐ大塚氏を目しく鎌倉へ系上しゐ

濃の稲井ゐく討死せしゐ。兄春王安王両公遺の傅ゐる大塚匠作が女壻ゐる
よりゐ祈くく。恩賞ゐ元しゐ昌賢ゐく豊嶋ゐる大塚へ人を遣しゐ縛の虚
実を糺明せゐ匠作ゐ女児ゐ既ゐ分明ゐりとの人ゐ墓六ゐ人とゐり。
武士ゐるべ元ゐ孫ハ僅ゐ村長ゐ命せゐ帯刀を許さるく八町四
反の荘園を宛行ゐ彼地の陣代大石兵衛尉ゐ下知ゐ兼て勤むべ元旨を
仰ぐ者ゐ是よりるく墓六ハ尾廂ゐ衡門ゐつめく造り建く奴婢七八人召使ひ荘
客ゐを遣ゐそ。ものゐ田へのゐ水ゐ引バその久後ハ孫ゐ孫ゐ豊け元人ゐ
ゐるゐけり。不題大塚番作一戍ハ曩ゐ東を伐ひく。信濃の産業ゐ赴
きるとゐく湯治ゐる程ゐ。足の疵ハ癒ゐ胸の筋や縮ゐるゐ程ゐ
行歩自在ゐるゐ。よりるくそゐ修行磨ゐ一年あまり送る程ゐ父の
要ハ果ゐるゐ武蔵ゐる母を迎ゐ同ゐ今茲ハ杖ゐ携ゐて大塚ゐ赴人と

山青堂蔵

ゆゑに甲斐のくにの夏は瘧疾に犯されて秋盡るまで頭あらむに憂苦乃
うちとりつゝ中ゐ年月さらに嘉吉も早三年ゆゝしうぬ世間陸元勇をうしなひ
大塚と告らるゝ人こゝの憚るゝ事あり孤城孤身の足を駐へ日よりと大塚の大の
字ゐ一点を加つ。犬塚番作と名告るゐのうち定めて世の経営もあらゞゐ
東は僅に織績ぐ。その麻衣の麻糸より細煙を立て絡つ。かゝる煙うづ二年の
流浪ゐ貯禄既に竭果て。いふせなりとゐ折春王安王のあん弟永壽王成
氏朝臣長尾昌賢ゞ討ひまて鎌倉の武将と仰ぎ戰死の家臣の子どもらゞ
彼此に潛居て呂出ゐ。ゐ流離の温泉に湯治まて行客ホゞ物ゐ
風声大きゐ番作夫婦ハ今ハ何の時代ゐ侯人綴行ハ不自由
ゐ。ことゐ武蔵へ起元母と妹とゐ對面して直に鎌倉へ推参し
春王丸のあん像見村雨のあん佩刀を成氏朝臣に献まて父匹ゞ人ハ
男井直秀ゞ忠死の趣旨告奇まて。ゐ進退ゐ君に任せ人ゐ
起行の准備して年来蔭ゐ蒙り由縁の里人ホゐ別ゐ告て武蔵の大塚
ゐ。番作ハ隻脚蹇て杖を力に道まゐ女房ゐ東に扶掖
数町ゐて憩ひ三四里ゐて日を つゐ
濃ゐ出ゐ十月のゐ及て。ゐ舊里近くゐ番作ハ今ゐ母の
人ゐ。ゐ郷より此て。ゐ白屋に立よりて。大塚迄作て人の妻と
女兒ハ差ゐ。と外ゐ。ゐ向ゐ亭主と。ゐ翁稍扱ゐ夫婦を見て
原来和達ハ彼方ゐの幾迹ゐ。ゐ母親ハ力まゐて二年あまり
年ゐ。ゐ病著を看とりハ。ゐ女の子ゐ不孝淫奔ハ告ゐ傷痛ゐ
文壻弥と山蟇六ハ孔彈せゐ。ゐ破落戸ゐ入ゐ箇様ゐの由緒を
ゐ八町四反の荘園を。ゐ刀を。ゐ今ゐ村長ゐ

大塚墓六とのゝ宅地ハ並桐のあるこ。如此ゝこの辺ふしそと叮嚀ふ海ゝ〻ぞ。
番作父あぐどうも驚きるる。妻亀蔵が為体墓六が人とるりさ久詳ふ問盡
ゝく外面へ退る出ゞ束ゝ共言葉ハゝ〻く頻ゞ涙さゝぐけるゞ且ゝ〻番
作ハ杖をつゞめて嘆息ゝ〻分の病著とハいひるぐゝてや気癖ふ年父さ祝て
母の終焉ゞあひ去ゞ加以父が忠死を墓六とかふ掠ゞ且大塚の苗字を
穢さる今ゝとのゝ父祈人ゞ村両の宝刀ゞふ勝利疑ひゝ〻ゝと〻ゝ
栄利の為ゞ妻と争ひ骨肉牆を鬩ぐ如ゝ〻ハゞ〻ぜざる而ゝかゞ武ん佩刀を嫌
倉殿ゞ献ぐゞ妻ハ不孝の人ゝ詐墓六ハ不義ゞて富り裕ゝる妻姉夫婦ふ
ゝのふぐゝゞゝハぬゝ。さゝあゝぐやと呟けゞゞ東ハ涙を拭ふのゝ父理ゞとゝ
ひゝ行ゝ慰ゝゝ目父あゝ育一嗟嘆ゝゝりけゝ。ゞふとふゞて番代ハ墓六許
起ゞゞ故老の里人ホを書ゞ且ゝ〻ゞ人妻のゝ人さゝふ為ゞとゝ〻ゝ見を告志ゝ父

説示ゝ〻く親の墳墓を獲んゞゞとの地ゞ復ひゝんとふ里老ハ番代が薄命を
あゝ且ゝて愉ゝくゞ引つ彼此人を召集合ゝく伴のゝ父ゝゝとゞゞ衆皆賞
憤ゞゞ塚ゞゞゞ村ハむゝゞ墓六大塚氏の采地ゝゝ。一旦断絶をゞとのゝとも本
領安堵の今ゞ至ゝく寡子ハ日蔭の花と凋ゞ姉夫ハひゝるぐゝ破落戸の墓
六ゞゞゞゞく横領せゝゞゝゝゝゝゝゝ不幸やあるゞゞとゞゞ今さゝふ。
争人ハ世話ゞふ證文の出張ゞゞゞゞゞ労ゝて功ゞゞ弘ゞゞゞ弱ゞを扶けゝ。
強ゞゞ折ゝハ東人の生平ゞゞ憎ゝゝゝふ墓六が面あゝふ番代ゝゝゝゝゝ
かゝゞ富村中ゞ引兼ゝく養ゝゝくゞゞゞゞ足ハ蹇てゞゞゞ折けゝゞゞゞ
ゝゝひゞ人ゝ二人ゝゝハ僉議ひて置ゝゝゝゝ憑ゝく立地ゞ衆議一決ゝく番代
夫婦父数名けゞ。かゝく件の里人ホハ番作がゞふ。その居宅をトゞふ墓六が
宅地の前面ゞふゝゞゞあふね空房あゝゞ。ゞ且究竟と購求ゝく番代夫婦ゞ

如へ積り。又残を出し集めて此二の田園を購求めとき爲番作田と唱つ。夫婦が衣食の料ゐせらるる其の舊主の恩を忘れず。番作が薄命を相憐むのみゐあらず。僧一とりの養六夫婦を物ゐ忘せんとその所為あるべし。剛毅木訥の仁よりしと聖語をとるべきかの人を稱へり。かるゆゑに番作ハ里人ゐが好意をて富むゐあるを忘れず苦ゐを苗字ハ姉夫を集めてゐ今更大塚ゐ復んも益なしとて。大塚と唱つ。里の総角ゐ蹟の師範しく親ゐ恩を報ひゐ東ハ里の女の子ゐ絮を延衣を紡ぐ技を教えて親たるゐ恩を報ひゐ里人ゐハ敬ひく。野菜の初穂何ぞとて贈るを受けり。時は嘉吉三年なり。去年婆房伏姫生れ今茲ハ義成誕生せり。支ハ肇集第八回の末に番作が癈人ゐ入りて支とも妻さえ入ゐ遂に歩く里人ゐ尊信せり。

けゐ方へやゐ行ゐ翌ハ人しく行ゐ旅と共に百歩の間を住居しゐ。渠一とびを妨を防ぐ。今ハとく履ゐ有一日亀絲ハ墓六と高量し人をしく。番作ゐ行ゐ女のかひゐ死ゐ母を看とりしく息ゐ。親の遺言黙止しく墓六どの死招死ハ絶こゐ家ゐ興せり。人の志ゐ所ゐ。若ゐ和殿ハ阿容こと戦場を逃去融のゐ如く支を隠しく。母の今果ゐ間廣くゐ婦女子を携来る。里人ゐを非欺う。既ゐその蔭死蒙りて恥とせを間近ゐ住居ゐとて死ゐ他人を親ゐ骨肉を遠けく。無礼ゐ大塚の家督ゐ。既ゐ一郷の長ゐ。よりや入ゐ少ゐ挾ゐ胡越のゐひを ゐとて四ゐ貴賤の差別あり人ゐ長少の礼儀あり。ゐ知ゐ

まどいつゝ。こゝろ村に措くゝて。他郷へ立去ぬ人とぞいひける。番作仰のゝく冷笑ひ。某寔に不肖なれども父とも仰ぐ竜城ゝく。主君の為に命を惜まゞる戰場にゝく死さる臣は君父の先途なれば。ゝん為ゝ君父の首級を隱ゝまゝ。ゝ強とゝゝく。ゝ君父の仇を報ずべきも親の結び〳〵女房ゝひ来ゝ名告あゝて。紀麿の御湯ゝゝ癒を保養ゝ。僅ゝ平愈ゝゝ自由ゝゝ長途ゝ為ゝ去歳ゝ又長病ゝ一年を化ゝ。今茲再び起ゝて杖ゝ携ゝ妻ゝ扶ゝ稍ゝ仰のけゝ母の終を背ゝ嫁の不孝ゝ淫奔人のよく為ゝ。ゝ嫁夫何ぞの功あゝて重職をうけゝ。大祖父賜ゝ又是ゝ為ゝ某父の送命ゝ。春王君の為人佩刀村雨の一腰を領ゝ奔りゝ。ゝゝ為ゝ嫌倉殿ゝ献ゝ聊爭ゝ。ゝ嫁夫婦の幸ひゝゝ。番作寔ゝ不肖なれば。不孝の嫁と

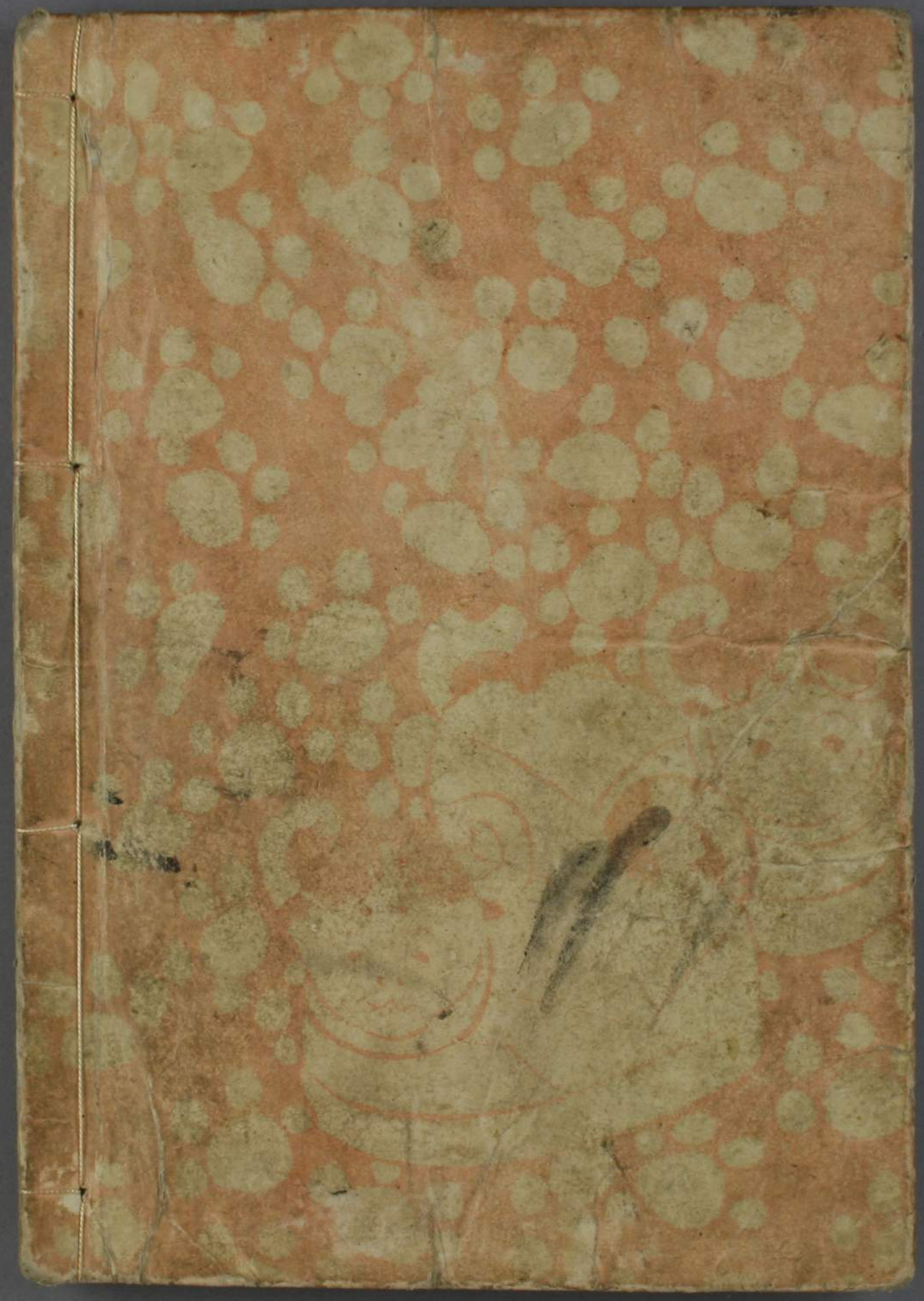
ゝゝ。ゝゝ不義の嫁夫ゝ。ゝ。ゝ。

たつか

うん
庚申塚
さるえ
ゐ
東神
まつ
女
猿を

異ふ世のさがとも。ひ死ぬるふつけくもるぶ薄命ハ歎くふ足らぬ只後
ゑ死ぬ不孝ともるるふ女房ゑ東を娶てより。十四五年ぶ間ゑハ男児三人
まで産せるとも。禍祟の中ゑるるくなるるく一人とるく生育ゆるるるれと
さるるゑ東ハ同庚まて渠くゑ二十の齢ゑるるるる又子をゑんるる離るること。
遺憾とゆふ唧ぶまる死夫の述懐ゑ東もあるるるるゑ捨ゆるる月
なるふく。ふかく慰めゆるるるが。忽地ゑ滝の川るる辨才天ハ式るるる
るる古廟まるく。霊験あるると人ハいるるる。祈らば應報なるるるるるゑ人ぶ
ゆて夫ゑ告て次の日より朝ゆく起く。件の廟ゑ日参し。一子を祈るるく。
念るる。今茲長禄元年の秋ゑるるるるるる。伏姫ハ房れ往るるるるるる
日を懈らぶ時ゑ長禄三年。伏姫自殺の翌年なるる。九月廿日ゑまるるるるる。冨山のあへ入る年。三年ぶ間一子
時死るるるゑまるるる。明残る月影を東ゑるるるるるる。遠く宿所と

生く。瀧の川るる岩屋殿ゑ条詣し。既ゑ下向ゑ赴けども。その夜ハいまぶ明
ざるとける。銚まるゆと。ゆるるるるく稱るるる露死搔拂ゆる。立かくるる田の畔ゑ。
脊ハ黒く腹ハ白る狗の子ぶ。棄らるるるるとゆるるるるるく。人まち白ゑ尾を揖て。
ゑ東ぶ裾ゑまるるるる。追々せぶ又墓ゑ来て離るるるるゑまるるれゑめるるるる。
立駐るるかくまで人を墓ゑるの死るるるる人ぶ棄るるるるるるるる。牡狗
るる。狗ハ黠の子を産ゆるるく。その子ハかるるるるる。三月ゑるるるるるるる。赤子の
枕辺ゑ狗張子死置るる。神ゑ赤死運ぶまるる。一子と祈るるゆるるるる。
でるるるるるる拾ハるるるるるるるるるるるるるる。抱きるるるるるる折るる。
南のるるゑ霎靂と紫ゑ雲るる引る。地ゑまるるるる遠るるるるるるるるるる。嬋娟るる
一個の山媛。楚の宋玉ぶ夢ゑ見えし。神女の佩死るるる。魏の曹植ぶ筆ゑ託
せし。洛神の顔死るるるる。黒白斑毛の老犬ゑ見るる毋左ゑゆ数顆の珠死含ゆて。

右の手を東を招くに、舞ハるくさ一ツの獣、投與のゆゆるんを東ハ今その奇特を見て、あるるくつんゆるるが、遠〻くゆるさ〻伸て、件の獣を受んと せ〻ふ獣ハ股を漏て、猥ゝと雛狗の不ゆうゆ落〻ゆ、其首ゝ彼首ゝと索ても 索でも又あることゆ、ある所〻とでゆゆそゆゆこの天をうち仰げハ、霊雲忽地迸 るくなりて、神女も共ゆるんえゆるゆゆ。平支ゆあくゆゆとゆるゆゆ。ゆくゆゆ雛 狗ハ抱元あげくいそ〻く宿所ゆ還るゆ、件の絆の類ハ夫番伽よつげて いゆゆゆ拝ゆとゆゆ神女の姿ハ山姫とゆゆめゆく。辨才天ゆ似ゆるゆゆ。そゆ 投げゆゆるゆ。獣ハ子亂であるゆんゆの狗取失ひ侍るゆ〻ゆゆ願望かゆゆぬ 祥ゆやあゆんゆゆるゆ絆ゆ侍るゆ。とゆゆ番伽沈吟ゆゆくそゆゆゆゆる べゆゆゆど件の神女ハ黒白斑毛の老犬ゆ乗ゆゆゆあゆゆどゆ。ゆゆ氏ゆ大塚 ゆゆゆどゆ犬塚と更ゆ元又ゆゆ名ハ一戌ゆ一戌の字ハ則支干の戌ゆゆゆ。

名詮自性いと選ゝ加。雛狗を獲ゝ念願成就の 祥ゆゆゆゆ。その狗をゆゆゆゆゆゆゆゆ畜ゆゆゆと綸ゆゆゆゆゆ東ハ有理と ゆゆゆゆゆゆゆゆ